



介護施設に出かける日々 地域で問題を解決していく



最近、出かけることが多くなってきました。
身近な問題に対処するためなのですが――。

ご高齢の方々を見守る

先日、地域包括ケア会議に出席してきました。地域の中学校学区の介護施設関係者や開業医、薬局、銀行、駐在所、町内会関係者、老人会、行政関係者が主な出席者。

地域で、お互いに連携しながら、ご高齢の方々を見守り、問題に対処していこうとする会議といえます。最近の事例を紹介したり、認知症の知識を深めるための講話を、開業医にお願いしたりも。

やさしく説得をした日

地域包括支援センターの職員が訪問したお年寄り宅でのこと。「自宅での夫婦だけの生活は、もう無理」と説得しても、応じていただけなかったとか。

そこで、親しくしている薬局の薬剤師さんのいうことなら聞いてくれるだろうということで、私のところに、その職員さんがやって来ました。そうして、「サービスつき高齢者向け住宅に入居するように、説得してください」と。

早速、老夫婦宅に行ってみると、

ひどい腰痛もあり、なるほど、2人だけの生活は無理だなと思われました。そこで、その旨、やさしくお話ししましたら、すぐに納得してくれて、スムーズに入居が決まったのです。

そうした報告もしています。

妻がもらい泣きを

地元で、30数年間、薬局を開いていると、定期的に保健薬などを買いに来ていたご高齢の方が、突然来局されなくなるということも。実際、最近多くなってきたのです。

心配して自宅へ行ってみても、灯りがついていません。“子どもさんのところでも、引っ越して行かれたのかな”と思いながら日にちが過ぎた、ある日のことです。

何か所かの介護施設を見学していたとき、親しくしていただいていた、おばあちゃんがいて、じつと私たちのほうを見えています。

妻が、「こんにちは、〇〇さんだよ」と声をかけると、昔懐かしい青森訛りで、「おめえはめんこいなあ。ここに来るとき、あいさつできなくて、気になっていた

んだ」と。続けて、「おらは、おめえとおらの娘しか信用できねえ。ここから出してくれえ〜っ」と泣きつかれました。

妻も、抱き合いながら、もらい泣きを。すると、施設の人が、「知らない方に出してくれっていつてるんだ」と思ったようで、飛んできました。そこで、関係を説明すると、かたわらで、にこやかに様子を見てくれたのです。

知り合いのケアマネジャーの中には、私が見学した施設の人から、「宮川薬局さん、先ほどみえましたよ」といわれた方も。

いずれにせよ、今後は、ますます介護施設に出入りすることが多くなりそうです。

宮川薬局(宮城県仙台市)代表
薬学博士・薬剤師

みやがわとしじ
宮川季士先生



プロフィール

1976(昭和51)年、東北薬科大学(現・東北医科薬科大学)卒業。'78(同53)年、同大学大学院修士課程修了。'87(同62)年、薬学博士学位。地域に根ざしたおクスリ屋さんとして、多くのファンが。

「夏バテが気になる時季です。ご留意を」